

アムウェイ・ネイチャースクール 第4期7回

『白神のブナ』

日時：2002年7月11日

講師：工藤 英美さん

於：日本アムウェイ株式会社 本社地下1階オーディトリウム

テーマ概要

普段、環境問題に馴染みのない方でも楽しみながら聞いていただける、市民環境講演会で、世界遺産に登録されている白神山地と世界最大規模のブナ林の素晴らしさを紹介します。

講師プロフィール

白神ネイチャー協会会長・秋田県自然観察指導員連絡協議会会長・（八森町の町おこしグループ）名無しのごんべえ塾塾長

（講演録注： 印がついているスライドは画像が別ファイルで掲載されています。）

司会：鈴江恵子リーダー

皆さん今晚は、これより第7回目のレクチャーを始めさせていただきますと思います。第4期のレクチャーも、今回と次回で終わりとなります。今日とそして次回は、アムウェイネイチャーセンターの鈴江が司会進行させていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

今日は、アムウェイの基金で行っている支援活動のご紹介その2になります。

日本で初の世界遺産の登録地、秋田、青森に広がる白神について、白神ネイチャー協会の工藤英美先生をお招きいたしました。先生、本当は今日の午後、東京に上京される予定でしたが、昨日の台風で、万が一このレクチャーに間に合わないといけないということで、昨日おいでいただいて1日お待ちいただきました。

工藤先生は、4月25日の屋久島のレクチャーをお受けいただいた方は覚えていらっしゃるでしょうか、ヘルメットをかぶって逃げてしまったサルのお話をされた、工藤先生です。その後はどうなったか、興味津々です。

白神と言えば世界遺産で大変有名ですけれども、非常に綺麗なブナ林だけではなく、伐採されて荒地になった場所もあります。今日は、荒地になった場所を100年かけて復元していこうというプラン、そして何故、保護運動が始まったかなど、白神全体について、綺麗な写真を交えて、ご解説いただきたいと思います。

では、工藤先生どうぞよろしくお願い致します。（拍手）

講演：工藤 英美 白神ネイチャー協会会長

先ほど会場に流れていた曲は、皆さんのレジメにある『悠久の森（ゆうきゅうのもり）マイ・ホームタウン』という曲です。

（資料1：末尾に紹介）

私は、八森町に生まれ、八森町で育っています。八森町の住民は、朝、悠久の森の曲で仕事が始まります。とは言っても、農家の方はこの曲で家に帰ります、朝4時半ごろから農作業を行っているためです。夕方は悠久の森の曲で皆さん家に帰ります。

作曲をした松尾一彦さんは八森町に生まれ育った方で、元オフコースのメンバーです。ご存知の方もいると思いますが、オフコー

スでギターを弾いていた方です。今は作曲もされていて、例えば、飛行機、JALニューヨーク便で使われている着陸の時の曲も、この方が作曲しております。

八森町が懐かしいと、自分が住んだ場所のイメージを曲にして、八森町に寄贈しました。八森町ではそれを元に詩を募集し、森田文人さんという方が当選されて、詩(うた)が出来上がりました。

スライドで、私が曲を聞いてイメージした風景を少し御覧下さい。

<スライド1：深い緑の連なる山々の写真>

白神山地全体の感じですが、詳しい説明はまた後でしましょう。

<スライド2：緑の谷間に雪の写真>

7月ですが、白神山地はまだ雪が残っている所があります。『耳を澄ませば聞こえる。森の声胸に、涙もそして風になる。心いつしかいやされ』というような感じです。

<スライド3：雪の中に悠然とそびえる木立の写真>

『命の森よ、気高き山地(やま)よ、迷いながら、生きている僕らを、流れる雲よ、静かな雨よ。遠く、そっと守って』という1番の詩です。

<スライド4：鮮やかな緑の木を見上げた構図の写真>

『人間は、なくしてはじめて大切さ、思う。僕らも、いつか星になる。何をその時残そう。命の森よ、気高き山地(やま)よ、それでも愛を、信じて生きたい。流れる雲よ、静かな雨よ、深く、そっと、守って。』という曲であります。

<スライド5：木漏れ日で、幹に映された木自身の葉で出来た影絵の写真>

ブナの木に木漏れ日が落ちておりました。ブナの木が自分の葉っぱを、自分の幹に映しているというのも、珍しい話です。

<スライド6：年代を感じさせる太い幹の写真>

写真に写っている大木はブナの木ではなく、カツラの木です。年月を経て悠々と大地に根付いた木に巡り会った時に、命の森という感じを強く受けます。皆さんはいかがでしょうか。詩が実に良くメロディーにあっていると思います。もし、よろしかったら、お帰りに後ろに置いてありますので、お買い求め願えると八森町が少し潤います。

さて、白神山地というと、皆さんどこになるか、ご存知ですか。次に図で説明したいと思います。

<スライド7：東北地方の衛星写真>

ランドサットの写真ですが、宇宙から見るとこの写真のように見えるという訳ではなくて、これは合成してあるのだそうです。どのように合成したかというところ、人手が加わっているところは、赤っぽく見えるように作ってあるそうです。八森町は男鹿(おが)半島のつけ根に広がる干拓された八郎潟より、青森県寄りに位置しています。

写真上では、濃い緑の部分が、白神山地になります。

白神山地は昔、出羽丘陵といわれました。白神山地という名称で呼ばれるようになったのは、昭和に入ってからです。八森町は白神山地と言われる場所の秋田県側のふもと付近になります。能代市の北端に峰浜村があり、その北端から青森県との県境までが八森町となり、大体そこから白神山地が広がることになります。大体というのも変な話ですが、実は、白神山地はどこからどこまでというのは、はっきりしていないのです。人によって、まちまちです。

例えば、平凡社の事典ですと、大体、西端は日本海から東端は秋田県の矢立峠付近までの峰続きの山地一帯をさすとはなっていますが、最近、青森県側では、これに更に西側の部分を北に延ばし青森県の鮎ヶ沢付近までを含むと言ってるんですね。秋田県の主張と青森県の主張を全部ひっくるめると、170,000ヘクタール位あります。秋田県の主張では、130,000ヘクタールだから、少なくとも、130,000から170,000ヘクタールの広さの場所である、とすることができますと思います。130,000から170,000ヘクタールと言っても、山の中に入ってみると、随分広いです。

青森県の西目屋から秋田県の八森まで遺産地域を歩くとすれば、3泊4日位かかります。もちろん道がないので、ブッシュを掻き分けてのことになります。

<スライド8：地形の鳥瞰図>

これは、高さを強調して描いた図ですが、私の住んでいる八森町は、谷が深く峰がとんがった険しい地形をしているのです。この地形の特徴は、富士山のように高い山がなくて、1,000メートル級の山がずらりと並んでいるという感じです。白神山地から外れて一つ、岩木山というのがあります。

お客さんが随分と来るのが白神岳で、往復8時間位かかります。初心者の方は、この二ツ森に来ます。二ツ森に行くには終点まで、これから話すいわゆる「青秋林道」の終点から約1時間くらい登ります。往復2時間みるとゆっくり山々を楽しめます。地形鳥瞰図を見ますと、随分山が尖っているように見えませんか。

<スライド9：侵食輪廻のブロックダイヤグラム>

これは地形輪廻から見るとどのようになるかということですが、地形というのは、これが番号順に平らな地形、険しい地形、平らな地形と変わっていくだろうっていうのが、デービスさんの考えであります。最初のこのA図とこのF図を比べて、どこが違うかということ、模様がちょっと違いますが、高さが決定的に違います。つまりこの高さがこのくらい薄くなっていますね、この分だけ削れたとこういうことなんです、その侵食されている間に、いろいろと地形が変わっていく。今、白神山地は、ちょうどDの満壮年期の時期にあるということなんです。このこういう時期というのは、じゃあ将来EやFのようになるかっていうと、どうもなかなかそうならないらしいんです。というのは、1,000万年前位から、ここが隆起しっぱなしになっているのです。だから、いつもこうなのですね。だから白神山地は、今でも、隆起しているようで、これからもこういう満壮年期の地形になって、こういう地形になるしか無いんだと思うんです。でも皆さんも、1,000万年位生きて見てください、どうなっているかちょっと分かりませんが。

白神山地はそういう特徴がありまして、その為に入人が簡単に入れなかった、それが遺産として残る、その元の条件といえますか、そういう地形だから残ったんだと思います。

<スライド10：大きいV字谷の山々が折り重なる写真。谷間には川が流れる>

分かりにくいとは思いますが、山の格好がVの格好に似てます。これはV字谷（ぶいじこく）といわれています。谷間には真

瀬川（ませがわ）という川が流れています。白神山地の地形は、このようなたくさんの谷間の集合体になっています。ですから、非常に人は入りにくいでしょう。

<スライド11：雪が残る、削り取られたような山肌の写真>

白神山地というのは、例えば、急な斜面の崖になりますと、太い木が1本も無いのです。これは急斜面な為に雪で削られて、草が少しはえているだけの、常に山肌が露わになる場所になっているのです。

<スライド12：緑豊かな森の写真>

崩れたものが運ばれていくと、ややなだらかな地形が出来ます。そこへ行くと緑の豊かな森が出来上がっています。白神山地というのは、崖となだらかな場所の混ざっている所なのです。なだらかな地形の所では、30メートル位のブナの木が生えています。崖に近いところにはゼンマイが生えていました。私達が昨年、調査の為に入りましたら、とても立派なゼンマイがぎっしり生えていました。遺産地域なので採れないから、僕達は1本も取らないで帰りました。もしも採る気になったら、30分間でしょいきれないくらい採れたでしょう。

これからお話す青秋（せいしゅう）林道というのは、このような常に雪で削られてしまうような場所を通っていく予定でした。

<スライド13：地すべり箇所を記した図>

地滑りの跡、崖崩れの跡を全部プロットした図です。たくさんあります。ですから、こういう所に道路を通そうというのは大変なことだったのです。

<スライド14：地質の断面図>

何故こういう地形が出来あがるのか。実はここに花崗岩があります。これは屋久島もそうでした。花崗岩がありまして、その上に堆積岩があります。この花崗岩というのは、大体、地下5キロとか10キロのところに形成されるのです。今現在は、1,000メートル位の陸地です。かなり隆起したのではと感ぜられませんか。

地下5キロとか10キロのところにあった岩石が、現在陸上にあるのですから、これはすごい隆起量です。現在も隆起しているだろうといわれる地域は、ここの花崗岩が存在する地域を含めて、白神山地の西南一帯らしいです。良く分からないのですが。

<スライド15：葉の落ちた後の大きな樹木の写真>

白神山地には動植物がたくさんおります。今日は『白神のブナ』という題ですので、ブナの写真を少し御覧下さい。春先のブナで、葉が無く幹はツルツルです。

<スライド16：枯れ木のような樹木の写真>

芽吹き出してくると、一斉に芽吹いて来ます。写真のものは、まだ芽吹いていませんが、周りの木は芽を吹き出しました。

<スライド17：全体にとげのようなものを纏ったブナの実の写真>

ブナの実です。今年はブナの実たくさん付けています。去年は、1個も付けませんでした。今年は大豊作で、その前の年は少しでした。私達が白神ネイチャー協会の仕事をしていて、最初は、ブナは毎年実をつけるものだとばかり思っていました。

ブナの実を採集した年が大豊作の年だったので、これは楽だということで、種を採集しまして育てたのです。ところが次の年は実をつけないので、これは変だというのでいろいろ勉強したり、大学の先生に教わったりしたら、普通はブナの実は5年から7年に一度しか実を付けないそうです。

ところが、最近は少し変になってきまして、東京でも3年に一度は付けていると聞き及んでいますが、ご存知の方はおられませんか。大阪の方の話の聞くと、2年に一度実をつけるのだそうです。最近は、毎年付けるらしいのです。しかし毎年実を付けても、それが発芽しないそうです。なにか変になってきているのです。

何故、ブナの実が豊作の年と豊作でない年があるのだろうか、不思議に思っておりました。私達が植樹をしようとしている場所を下調べしましたら、周りにブナの木が1本も無いのに、ブナの稚樹、高さが2メートル位の木があちこちに見えるのです。地域の中学生に手伝っていただいて、何本あるか調べて見ました。

10アールあたり、150本位ありました。稚樹は均一にあり、どこかに纏まってあるのではなかったのです。去年と一昨年で、私はその種がどこから来たのかということに納得しました。

ブナは、一生の間に付ける実は少なく見ても50万個、多ければ200万個位になるだろうと言われていています。ブナの寿命は、大体200年平均位ですから、少なくみても200年間で、50万個の内1本だけ成長すれば良いほうです。2本になると過密になります。

50万分の1という数字を、ブナは正確に計算しているのでしょうか。自分の子孫を自分から離してやるということは、ほとんどの生物が行う行為です。ブナは子孫を離れたところに残す方法をどのようにしているのでしょうか。

森の動物達で、特にアカネズミというネズミがいます。アカネズミが、食糧としてブナの実を大体10粒位をまとめて隠すと、次にまた別のところへ隠します。それを、あちこちに自分の隠した場所を忘れるくらい隠すので、食い残しが出来ます。食い残しの所に芽が出て来るのです。なるほどどうまいことを考えたもんだな、考えたのかどうかは分かりませんが、そんな具合のようです。

<スライド18：実のアップ写真>

もしも、毎年ブナが実をたくさん付けているとネズミが増えるでしょう。ブナの実全部、ネズミに食われてしまうので、子孫は出来ないだろう。だから何年かに1回大豊作という形で実を付けた方が、ブナにとっては子孫を残しやすいのではないかと、こういう考えです。

一昨年がブナの実の大豊作でしたので、去年、アカネズミが大発生したのです。僕達が山に入っていくと、足元までアカネズミが出て来るのです。そして、ブナの小さい芽を根元からポキンと折り、口にくわえて走っていき、1メートル位離れた所にしゃがんで、ポリポリと2分位で全て食べてしまいます。

夏頃になるとたくさん出た芽が、ほとんどなくなっています。そういう自然のからくりとでも申しましょうか、せめぎあいとでも申しましょうか、そういうことが白神山地では起こっているようです。

<スライド19：雪の上に実がたくさん散らばっている写真>

大豊作の次の年に、残雪の上に散らばった、ブナを包んだ殻です。中身は全部、食われてしまっていて、ありません。

<スライド20：根をしっかりと張った古木、周りに若い芽がある写真>

おそらく300年以上は経っているであろう木です。条件が揃うとかなり年老いたブナになります。年老いたブナですが、周りには新しいブナが生えています。地面に何かを囲うようにテープが見えますが、これはこの下にブナの小さな芽がたくさん出ていまして、これをお客さんが踏み潰すのです。そこでテープを張って保護しているのですが、ねずみが来るので、やはり50万分の1だけ成長するということになるでしょう。これは、大変なことです。

<スライド21：紅葉した大木の写真>

秋になりますとブナが紅葉しだします。黄色になるし、茶色になるし、金色に輝くことがあります。『わっ、すごいなあ』と思うことがありますが、大体こんな具合にして紅葉が始まります。

<スライド22：紅葉した森の写真>

先ほどは1本の木の写真でしたが、林になった場合は、全体的に絵の具をまぶした感じになります。皆さん、紅葉した森の写真を大きく引き伸ばして、自分の部屋のふすまの絵にしたらいかがでしょう。気持ちいだろうなと思いませんか。

<スライド23：葉の落ちた木の写真>

白神山地はブナばかりではなくて、ダケカンバも随分あります。ダケカンバとブナの混合林になっております。沢に入ると、サワグルミとブナの混合林になります。ブナの純林という表現を時々聞く事がありますが、純林はなかなか出来ません。なにかと混合しています。これは大変に重要なことだと思っているのですが、純林というのは生きる上で余り良く無いようです。

秋田県では、秋田杉を植栽していますが、あれは杉の純林を作ったのです。ところがどうも生育が良くないです。これからは、杉と何かの混合林にしたらどうか、という話が出て、実際もう初めている方もいます。アイデアが出てから、実際そういう森になるには、50年か100年かかるので、なかなか大変です。

<スライド24：年代を感じさせる太い幹の写真> (<スライド6 >)

先ほど見たものですが、カツラの木です。周りにはブナの木があり、ブドウの蔓がつたっています。植物が混ざりあって、お互いに生存を競争しながら生きているのです。いろいろな植物が共存しているということが、世界遺産に登録された、非常に重要な一つの意義だそうです。

自然の中では、生物同士が非情なせめぎあいをして、生き抜いているわけです。人の手がほとんど加わらないで、そっくり残っているというのが、世界遺産に登録された一番大きい理由だそうです。理由が書かれた文章を読んで見ると、「普遍的な」という言葉が出てきます。関係者に「普遍的な」ということはどんなことですかと聞いたら、いま話したような、人手が殆どかからないので自然の状態で生物同士がせめぎあって生活している様子なんだそうです。白神山地はそういう森になっています。

<スライド25：白い羽毛のような花の写真>

かなり高い、樹高20メートルくらいの樹の下には別の植物がいます。ウズミザクラ(上溝桜、上不見桜とも書く)という桜です。花びらをよく見ると、5枚の花びらがあります。一枚の花びらにたくさんの穂の様なものがついてます。

<スライド26：紫色をした葉の木の写真>

賑やかな葉の色をした植物で、ウズミザクラのような木が大木の下に位置していて、高い木が使い切れなかった残りの光を使って、下に位置する植物が生活しています。オオカメノキといいますが、ムシカリとも言い、図鑑ではムシカリという表記が多いです。紅葉し始めているのですが、ほとんどの木が赤や黄色に紅葉するのに、ムシカリは紫になっていきます。いろいろな色から最終的に紫色になってしまいます。面白い植物です。

先日、東京方面からツアーが参りまして、案内しました時、『あのこれが、オオカメノキです』と説明したら、『ナニナニ、お金の木があるって』と近づいて来た方がおりまして、そのあとツアーの皆さんの間では、『おおかねの木』になりました。ツアーの中で言いだした人は、ひやかされるので、『ガイドの発音が悪いからだ』ということになりまして、こちらが謝る立場になったというエピソードもありました。

<スライド27：木の幹に繁茂するコケの写真>

ムシカリの生えるところが3番目の位置です。4番目には、レジメに書いてあるように、アオモリマンテマやツガルミセバヤ、ツバメオモトなどの植物が生えます。白神山地の森の構造を考えて見ますと、4階建てのビルディングみたいになっているのです。1番上に住んでるのは、ブナやダケカンバ、サワグルミやカツラなど高い木が並んでいます。

2番目に残りの光を使って、ハウチワカエデやナナカマドなどが生えています。

3番目にはムシカリやリョウブなど小さい木が生えます。4番目に初めて草が生える、という格好になっています。

実は5番目もありまして、それが苔です。写真はブナの木に付いている苔で、雨の日は非常に元気になって綺麗です。太いブナの木に苔が元気良く育っています。白神山地での植物構成は、大体4階建てプラスアルファです。

森の中には動物もいます。動物の写真はなかなか撮れません。ツキノワグマがいます。写真の凄腕プロの方でも、生きているのはあまり撮れなよういす。遠くから撮ったのはありますが、恐いですから撮れる機会は余りないようです。

最近そのツキノワグマが人里に降りて来るようになりました。例えば、お婆さんが歩いていたらちょっと段丘の高いところにある田圃から、突然岩が落ちてきたと思ったら、クマが襲ってきたのだそうです。お婆さんはびっくり仰天して、『わぁクマだ』と、腰を抜かしたタイミングと、クマが手をはらったタイミングが、ちょうど一致して、空振りになったそうです。それでお婆さんは無傷で助かりました。腰抜かすというのは護身術になるのですかね。腰抜かせない方はクマの手でやられています。そういうことがありました。

何故、襲われることになったかということ、お婆さんが下を歩いていた上方に、田圃がありまして、稲を刈ったものを我々は『ほによ』といいますが、そこにほによかけしておったのです。クマがほによを食べておったのを知らないで、下を通ったので、クマは自分のその食い物を取られると勘違いして襲うのです。クマに襲われるときというのは、クマが食事中やられます。食事しているかどうかは分かりにくいですが、食事中のクマには近づかない様にしたいものです。

去年は、海岸でタコを捕っている人がクマに襲われました。新聞に次のように出ました。『海岸でタコを捕ってる漁師が襲われた』と書いてあるので、新聞記事を読んだ方に、『おい、白神のクマはタコ食うのか』と聞かれました。タコを食うわけではないのですが、海岸に出てきているのです。

タコを捕るといのは、棒の先にカニの甲羅を付けて海に差し込んでやると、タコが赤いものにくっつく性質があるので、くっ付いてきます。それを取り上げる。こうしてタコを捕っているところを、後ろからクマに襲われたそうです。ビックリして、クマと人間が一体になって海にドボンと落ちたそうです。クマもビックリして、反対方向に泳いで逃げて、その漁師も別の方向に逃げ

て、両方とも助かったそうです。

何故クマが海岸に出るようになったのか、皆さんは何故だと思いませんか。一つの理由は、海岸にキャンプに来た人達が食べ物を捨てていくからです。例えば、家族や、子供達のリクレーションなどで食べ残しが出るでしょう。鍋で作った食べ残しを車に積んで帰れないので、そのまま捨てていくのです。捨てられたものをクマは食べに来ます。

おにぎりの食べ残しなどを捨てて行く人もいるのですから、海岸に行くと食べ物があるのをクマが学習しだしたのです。残飯をあさる機会が増えて、海岸に出るようになりました。その他にこんな話がありました。5月25日ですが、山のベテランの方がクマに襲われまして、逃げている内に自分がどこを歩いているか分からなくなって白神山地を迷って、8日目に助けられました。

この日は何故クマに襲われたかという、クマが襲う場合には、自分の子供を連れている時に人に出会うと絶対に襲います。食い物を食べてる時も襲います。もう一つは、5月25日は天候が急変した日で、白神山地に霰(あられ)が降った日です。天候の変化をクマはいち早く感づくそうです。急いで自分の巣に帰る時に人と行き会うと容赦しないそうです。

そういう三つの場合がありました。白神山地では毎年クマの被害があります。お客さんに『クマと行き会ったらどうしたらいいですか』と聞かれます。わたしは『諦めてください』と返答しています。クマと出会ったらどうしようもないです。ぼくが一番最初に逃げて帰るかもしれません。

お客さんによっては『ああ、そうですよね。クマの住処(すみか)に私達が入るのだから、それはそうですね』という方もいます。

基本的に、“命は自分持ち”ということで今のところガイドしています。みなさんお出で下さる時は、やはり“命は自分持ち”で来ていただきたいものだと思います。『クマに遭ったら諦めてください。』と、こういうこととなります。

白神山地には、シカではなくてカモシカもおります。カモシカは食べると非常に美味しいそうです。昔は食べたそうですが、今はカモシカを獲ってはいけないということになっているので、昔のマタギの人達はカモシカを獲ったと言わないで、青獅子を獲ったと言っています。青い獅子というとカモシカのことだそうです。そして昔は食べておったそうですが、今は罰せられます。八森で2、3年前にカモシカを食べた人がおまして、罰金を1人あたり何十万円ずつ取られました。そういうエピソードがありました。

最近、サルが町中に出てきます。サルも大変厄介で、先ほど司会の方から少し話しがありませんでしたが、だんだん人里に降りて来るようになり、稲を食べてしまいます。農家の方が困って案山子(かかし)を作って、案山子にヘルメットをかぶせておき、2、3日して朝、見に行くと、ヘルメットが稲の中を走っておったというのです。良く見たら、サルがヘルメットをかぶって、歩いておったというのです。案山子の真似をしたようです。

サルはいろいろなものを食べます。サルが1番好むのは豆です。カボチャも食べます。カボチャが1個あると、1頭のサルの2日半位の食料になるそうです。詳しく観察した人がいまして、サルがカボチャを食べてるところを『こらーっ』と追う訳です。サルは逃げるのだけれども、逃げる時に、両腕にカボチャ2個を抱えて逃げるというのです。だから、八森のサルは2足歩行です。『こらーっ』で追っている農家の方が、その格好が可笑しくて、つい笑ってしまうらしいです。また、ネギも食べます。ネギは青いところを捨てて、白いところだけ食べます。昨年ジャガイモを食べるようになりました。いままで、全部地表に出ているものだけを食べておったのですが、去年から、土の中の物を食べるようになったようです。

実は、八森町では、サルをなんとかしたいと、いろいろ県の方に駆除をお願いしましたが、県では頑として駄目ですと、駆除はしていただけていません。しょうがなく、なにをしたかという、ゴム弾、ゴムを普通の猟銃に詰めて撃ったのです。そうする

と少しはいいのではないかと思ったのですが、困った事が二つありまして、一つはゴム弾を猟銃に詰めると、ゴムが詰って後が使えなくなるそうで、銃を持っている人があまり協力してくれません。

もう一つは、効果があまり無いのです。サルにポンと当たると、サルが当たったところをぼりぼりと搔いて悠々と去っていくそうです。ぜんぜん効き目が無いのだそうです。しかたがないのでネットを張って、2,000ボルトの電流を通しました。さすがにこれは近づけないです。しかし、ネットを張り巡らせるのは大変なのです。サルは大変に賢くて、端を探して、ちょっとした隙間から入って来ます。どうもうまくない、どうしようかと話し合い、みんなでわいわいとサルを追いあげようかというので、サルの追いあげボランティアというのを全国募集しました。

やはり日本は広い、世界は広いです。応募して来た方が何組かおりました。その一人は、八森に住んで、一生懸命にサル追いをしてくれています。町でも感謝しまして、町の臨時職員として働いていただいています。

もう一つは、お名前を紹介します。今井さんというご夫婦が、獣医さんで、お金が貯まるとサル追いに来てくれるのです。ご夫婦で、サルを調査したり、追いあげたりしてくれています。お金がなくなると帰って仕事をして、という具合に、その方がサルをよく観察しているのです。ジャガイモをどうしてサルが食えるようになったか、つぶさに観察した話しをこのまえ聞きました。

サルが畑の隅に自分の隠れる場所を持っていて、畑を作っている農夫が、ジャガイモを植えているところの草取りをして、土をならしておいたそうです。それをサルが見ておいたそうです。農夫が帰ったら、サルがこのこ出てきて、同じように土をなでる仕草をした、するとたまたまジャガイモの茎が手に引っかかったそうです。

抜いたらなにか丸い物が付いている。なんだろうと食べた、「おいしいっ」ということになった。その後は、次から次と仲間を連れて来るのだそうです。そうして学習していくのです。土の下の根を引っ張ると、下においしい物がある。今年で2年目ですから、これからどんどん広がっていくのではないかと思います。今度はサツマイモを見つけて食べ始めるのではないかと、心配しています。

その他に大型のキツツキ（啄木鳥）がいます。クマゲラという、大型のキツツキで、宣伝にたくさん使われています。ツアーなどで来られると、皆さん『クマゲラを見せてください』と言われます。ところが僕も、声だけは聞いたことがありますが見たことが無いです。クマゲラは、天然記念物になっていて、なかなか人目には姿を見せてくれません。

羽を広げると2メートル位のイヌワシもいます。それから、川には、シノリガモという鳥がいます。このように沢山の鳥やねずみなどの動物がいるわけです。

2枚目のレジメにいきまして、最近注目されてきているのが微生物です。微生物では、『白神こだま酵母』という、酵母菌の名前を聞いたことのある方、おられません。パンを作る酵母菌ですが、白神山地から見つかっています。どのような特徴のある酵母菌かと言いますと、普通の天然酵母は醗酵に16時間少しかかるそうですが、『白神こだま酵母』は、醗酵を2、3時間で済ませます。

八森町では、白神山地に来た方にパンを作る体験をしていただいています。山へ登って帰ってきてから、パンを作って1日コースというプランが出来ています。白神こだま酵母の特徴というのは、3時間で出来るということの他に、マイナス40℃でも酵母が死なないのだそうです。この特徴を活かして出来ることは、暇な時にこねておいて、冷蔵庫に入れておきます。必要な時に取り出して使うことができます。パン屋さんにとって夢の酵母といわれる所以は、パン種を作り置きが出来ることです。

酵母発見のいきさつを話しますと、秋田に太平山という酒屋さんがありまして、酒屋さんの社長が理学博士の小玉さんという酵母の博士で、『小玉コレクション』という世界的にも有名な方です。現在コレクションは3,000種以上持っている方です。

小玉さんが酒を造る為に酵母菌を探しておったのですが、たまたま見つけた酵母を『これは駄目だな』というので、酒には出来ないがパンは出来ないかなということで、パンを作ってみたそうです。醗酵は驚くほど速くするけれども、葉っぱの腐ったような臭いがするので、『これは駄目だな』と思っておったそうです。

ところが、高橋さんという、食品研究所の所員が『僕にやらせてくれ』と試作したわけです。ですが、やはり葉っぱの腐ったような臭いがするけれども、しばらくした後、すごく香ばしい、いい臭いがして来て『おや』と思い、続けて作ってみたら素晴らしいパンが出来たのです。今は盛んに売り出しています、秋田県の特許になっています。

秋田県では県外には酵母を出さないということでしたが、東京の八王子に、大塚さんというパン屋さんがありまして、大塚さんが再三、県にお願いに行き、どうか酵母を使わせてくれとお願いにいったそうです。だが県では、『駄目だ』というので、『じゃあ、作らせてみてくれないか、売らないから』と何度も交渉に来られるので、県でも根負けしまして、『じゃあこの白神こだま酵母は、輸送にどのくらい耐え得るか、実験するんだ』という名目で出したのです。

大塚さんが白神こだま酵母を使ってパンを作ったら、素晴らしいパンが出来たのです。この時に妙なことが起こりまして、話しが最後の方にいってしまうのですが、私達『白神ネイチャー協会』では、植林で100年計画をたてています。私は100年も生きられないので、後継者を育てないといけない事情があります。

小学生には、よく「来てください」と言われることがあり、そのときは必ず行きます。その日もちょうど、小学生に頼まれてブナの林に行きました。ブナの落ち葉を1枚1枚はいで、段々段々葉っぱが崩れていて、土になるところを見せておったのです。見ておった小学5年生の子どもが『うーん歴史を感じるな』と言うのです。小学5年生が歴史を感じるなって、ビックリして後ろを見たら、町の教育長さんのお孫さんでした。

『そうなんだよ。ここに実はこだま酵母菌のような、酵母菌がいっぱいあるんだよ』という話しになりました。実は前日、パン屋の大塚さんから連絡が来ておりまして、『白神こだま酵母というのは、白神山地の水を使うと良さそうだ。水を送ってくれ』と言われていたので送った次の日だったのです。

『実はこうこうしかじかで、水を送ってやったんだよ』と子供達に言ったら、今度は女の子が『やー、そのパン食べてみたい』というので、『じゃあ、よし、来たらあげよう』と話しが決まり、大塚さんから、東京の水で作ったパンと、白神山地の水で作ったパンの2種類が送られてきました。たくさん来たので、そのうちの1個、1個といっても大きなパンなので、それを小学生に1個あげて、食べて貰いました。

食べた子供達は非常に感激して、感想文を書いて私に送られて来ました。僕も感想文を読んでみて非常に感激しまして、それをそっくりコピーして大塚さんに送りました。大塚さんも大変感激しまして、それ以来、学校と東京のパン屋さんの文通が始まりました。

ドキュメンタリー映画を作っている小池さん、今日、おいでになっていますか、という方が、パン屋さんと小学生のやり取りを見て、是非、ドキュメンタリー映画を作りたいというので、文通の様子を去年1年間、小学校に張り付けて映画撮影したのです。今年度中にはドキュメンタリー映画が完成すると思います。最初は八森で封切して、それから全国にまわるかと思いますが、もし目に留まったら是非見てくださいますか。

春秋林道の話に移らせていただきます。春秋県境奥地開発林道（せいしゅうけんきょうおくちかいはつりんどう）いわゆる春秋林道（せいしゅうりんどう）という話ですが、持ち上がりました。春秋林道の発端は、八森町です。レジメの2枚目のところに書いてありますが、八森町は、昔は大変に裕福な町でした。大体、町で必要な年間予算の3倍位の収入が入ってきたと言います。現在

は、必要な予算の16から17パーセント、20パーセントいかないです。いわゆる過疎化になっている。それを打開する為に考え出されたのが、奥地にある白神山地の木を伐採してお金に換えようという考えです。

<スライド28：白神山地地図、八森町の位置>

八森町では、昭和33年に奥地の調査を行っています。内容を読む機会がありました。現在の白神山地と呼ばれる場所は、青森県側で言い出している範囲ですが、八森町がここです。こちらに西目屋村がありますが、1日で八森町の役場庁舎から二ツ森の北東を通り、沢添いに西目屋村まで調査しました。

何故春先に急いで調査したのかと申しますと、雪がまだある間で、雪が堅いうちに突っ走ったほうが実施しやすかったわけです。報告書を読んで見ますと、まとめのところに『森林資源は無尽蔵』と書いてある。調査に入った人達がビックリ仰天したというのです。『こんな良い森林資源がまだ眠っておったのか』と、『これは是非使わせていただきます』と、こういう発想が昭和33年に出た。

そして調査した人の中で、1番若い方が20年後に八森町長になったのです。昭和53年に、青森県境奥地開発林道開設促進期成同盟会というのを作りました。それが八森、西目屋、鯉が沢、岩崎等の市町村の首長達が集まって、開発しましょうということになったのです。

開発計画を見て1番驚いたのが、藤里町に住む鎌田孝一さんという方です。白神山地のことをNHKの「プロジェクトX」で放映しましたが、御覧になった方おられるかと思えます。その番組内で紹介された鎌田孝一さんですが、計画を最初に聞いたときは峰を越していく、いわゆる「峰越し」といわれる方法で林道を作るのだろうと考えていたそうです。それだったら大きな被害はないだろうと思っていたら、計画書の中の林道は、峰を右に左に跨ぎながら進む方法になっていたそうです。つまり、峰の両斜面のブナ等の伐採集材が可能のように出来上がっていたのです。林道ですから当たり前ですが、森林を伐採するような林道だった。それで、鎌田孝一さん達は非常に驚いて、これは絶対に駄目だと、反対運動を起こします。

<スライド29：ブナの学校パンフレット>

鎌田さんは反対運動を起こしますが、村八分にされます。パンフレット右側のこの方です。左には付録が一人います。背広を着ていると分からないでしょう。中央にはマタギの方がおりますが、この方達が命をなげうって反対運動をしたのです。

<スライド30：白神山地を守る会が要望提出の新聞記事>

白神山地のブナ原生林を守る会や、春秋林道に反対する連絡協議会、赤石川を守る会など、次々と出てきました。たくさんの反対があるにも関わらず、昭和57年に、反対の中、工事が着工されました。もしかして皆さんの中でも、反対運動ご署名願った方もおられるかも知れません。

白神山地を守るべきだという陳情が国会に提出された。山を守る為に国会に陳情を出すということは初めてだったそうです。政府も考え始めて、いろいろな調査が入りました。そして調査の結果、やはり開発をしないで自然を残した方が良いという結論に達したのです。

平成2年に、白神山地の一部を、『森林生態系保護地域』と指定しました。森林生態保護地域と言いますと、法律ですから、国会でいつ取り消されるか分かりませんし、また取り消しになる可能性があるものですから、なんとかしないといけないというので、世界遺産に登録しようではないかという話しになりました。

<スライド31：世界遺産登録申請の新聞記事>

いろいろな方が、いろいろなところで活躍されました。平成5年に、16,971ヘクタールが世界遺産委員会で決定になり、登録になったわけです。遺産地域は5年に1回審査があります。1回目の審査は無事パスしました。来年か、再来年には2回目の審査があります。5年に1回ずつ審査があり、自然の状況が壊れていくと、遺産登録は取り消されるという運命にあります。

私達は地元で、大変に心配しているのは、世界遺産になってからお客さんがたくさん来てくださるんです。取り消されると来なくなるのではないかというのが、我々の考えです。世界遺産を目玉にした投資は危険ではないです。建物を作るのは止めよう、お金をかけて、お客さんにたくさん来ていただく方法はとらない様にしようとして現在はそう考えています。

少しずつ、そっと来ていただきたいものだ、こう思っている。そうするといつまでも続くのではないかなと思っています。そういう動きの中で、白神ネイチャー協会が発足になりました。発足には下地があって、平成6年いわゆる世界遺産に登録になった次の年です。

<スライド32：電源地域産業育成支援事業の表紙>

八森町では「森と共に生きる」という計画案をまとめました。審議委員の中に私も入ってまして、力説した事があります。それは『自然を食い潰さない観光をしよう、自然を食い潰さない町興しをやろう』ということでした。

具体的にはどのようにするのかということで、「森と共に生きる財団」を作ろうという構想を話したのです。研究をしながらどこまで観光に使えるか。研究組織も含めた財団を作ろうと提案したのですが、その時には、金がかかるので僕が生きている間は実現しないだろうと思っていました。

<スライド33：『八森町100年構想』表紙>

続きまして、「八森町100年構想」というのが立ち上がりました。これは、世界遺産にもなったことだし、観光で何とか町を興せないかということで、有志が集められて審議したのです。

この中でもやはり自然を食い潰さない観光をしようということが提案されました。『白神の森と海に生きる』ということが提案されました。これが、白神ネイチャー協会の下地だったわけです。

<スライド34：第4次八森町総合振興計画ちらし>

第4次八森町総合振興計画というのがあり、これは平成7年に策定したのですが、10年間は今のスピードに合わないです。後半の方は作り直そうということになり、計画を進めました。

<スライド35：植樹ボランティア募集ちらし>

お配りしておいたパンフレットに、植樹ボランティア募集というのがありまして、白神と書いたその下に、『山の森海の森二ツ森づくり』というのがあります。『白神山地、植えようブナを、育てようあなたの心を』こういうタイトルを設けました。こういうタイトルというのは若い人が作るものです。我々にはとっててもこういうタイトルは頭に浮かびません。

<スライド36：白神ネイチャー協会紹介の文>

パンフレットの中を開いてみますと、白神ネイチャー協会の紹介があります。八森町というのは、1本の川が全て町の中に入っているのです。だから、川を汚すということは、八森町に住む自分達の生活を汚すことになります。汚さない為には、森を創ればいわけです。

例えば、大きい川になると、上流の町で頑張らない限りは下流は良い影響を受けられません。八森町は自分の所で出来るのです。川が町中を走ることに注目しまして、自分達の町の中で、いわゆるリサイクルが出来るのだという発想だったのです。このプランを作るにあたり、アムウェイから環境基金をいただき、僕が生きている間は無理だろうと思われていた財団に似たものが立ち上がったのです。

今では会員も増えて、行事への参加者も増えてきて、今は森作りをやっております。今年はまだ3回目になりますが、10月6日に計画しております。もし良かったらおいでください。まだまだ97回残っていますから、今年が駄目なら来年、来年が駄目なら再来年と、もし、100回目に参加する人がありましたら、今ここで、賞品を差し上げます。100回目希望される方、おられません。僕は生きていないので、責任は負えません。

白神ネイチャー協会を発足させて、実際に活動してみると、山に木を植えて海が良くなるというのは、皆さん信じますか。北海道と岩手に2例あるのですが、我々のところでもあり得るだろうか、『いや、あり得る』『いや、あり得ない』といろいろ議論がありました。皆さんのお手元の資料に入っているかと思いますが、資料にディベート論争に使ったお話がありますか、後で家で読んでみてください。

会員は当時50名位ですか、バッチリ二つに分けて、賛成と反対と討論をやらせたのです。苦し紛れにいろいろな意見が出まして、拾いあげて全部まとめました。

<スライド37：ディベート記録文書>

この「ディベート」からわかったことは、ブナを植えようといっても、ブナだけを植えるのではなくて、実は森を創るのだということをお皆さん理解したのです。我々は『ブナ植えよう、ブナ植えよう』と言っていますが、ブナの実が白神山地では5年に1回くらいしか出来ない。他のブナと比較して、私たちの白神のブナは固有のブナであるということがようやく分かってきました。

世界にたった一つのブナなのです。その固有のブナの遺伝子を乱したくないと、白神山地から採った種で苗を育てて山に返そうという運動をしているわけです。今年、ブナの他にミズナラや、他の植物も植えることになっています。いわゆる森を創っていくということなのです。

<スライド38：緑の濃淡がとても綺麗な山（二ツ森）の写真>

八森ではないのですが、我々の植林している近くに、『二ツ森』という山があります。山が二つになっています。それで『二ツ森』です。

<スライド39：手前には岩礁、右遠くに防波堤のある海（二ツ森）の写真>

海の方にも、『二ツ森』があるのです。同じ字を書きます。我々は『山の二ツ森に木を植えて、海の二ツ森を育てよう』と、頑張っているのです。

<スライド40：魚を青いシートの上に広げている漁師さん達（ハタハタの網はずし作業）の写真>

海の二ツ森はハタハタが捕れるところです。昔は随分たくさん捕れました。木箱が1個50円の時に1箱60円でした。ですから中身は10円だったのです。今は、3分の1位のハタハタの量で5,000円、良いハタハタだと10,000円するそうです。大変な高値になったのです。

八森町の漁師は、1年間の内の半分はハタハタで生活します。ハタハタが捕れる期間は1週間から10日ですので、半年を1週間か10日での勝負になるのです。後の半分はイカ漁と、こまごまとした漁をしています。写真は刺し網にかかったハタハタをはずしているところで、12月ですので寒いからはずすのが大変です。

<スライド41：ブナの苗木栽培日記>

種を確保する方法を考えた時、どうも上手い方法が無いのです。東京農大の学生や先生にいろいろ実験して貰ったのですが、冷凍してみたり、いろいろ試してみましたが、安く保管する方法が無く、種を確保する方法が見つかりませんでした。他所から持って来ることができないものですから、ディベートの中にあつた「森作り」（単にブナの林を作るといっただけでなく）ということが非常にクローズアップになり、ブナに限らずにいろいろな植物を植えようという考えで、毎年の活動がカバーされるようになってきました。

二つ目は、実際に植林して見ますと、まず、植えたブナの稚樹は雪の中にあります。雪が段々と消えてくると、1番最初にブナの芽が先に出てくるのです。その時点で周りに食べ物が無いので、ウサギがブナの芽を食べるのです。プツンと切って食べるのです。ウサギに食べられることを防ぐ方法をいろいろ相談しました。東京農大の実験していた結果が、1本、2本、3本と10本までまとめて植えるとどうなるか見たのですが、10本まとめて植えると非常に成長が早い。だから10本植えをしようと言ったけれども、今度は苗が間に合わないです。仕方が無いので、中間をとって3本ずつ植えました。3本ずつ植えたら、ウサギが1本位は残してくれるのではないかと期待して植えました。しかし結果は全部食われました。生易しいものではありません。ウサギ対策がまた一つの課題です。

今年から取り掛かることですが、ブナというのは日の光が当たらないと成長しません。植えたいところが高さ2メートル位の笹藪で、そこにブナを植えても、光が当たらないから育たないわけです。笹を刈り取るけれども、しばらくすると生えて来るのです。東京農大の学生さん達に実験していただきまして、1平方メートルを全部根を切って、マットを敷いておくと、笹が伸びてくるまでにどのくらいの時間を要するのか、測定して貰っていますが。

次の年には、すでに筍（タケノコ）が出て来ています。筍が何本出てきたのか、調べようと思うと筍採りの人が入って来て採ってしまい、分からなくなっているのです。その笹藪にブナを植えようすると、一般の方から、我々の筍を取る場所を刈り払うのかという文句が来るのです。仕方なく、今年はずじがりという方法を試すことにしています。筍を採るところも残して、植えるところも作ってという方法を取ろうと思っています。

笹が、少なくとも5年間伸びないと良いのですが、3年位で埋まってしまふのではないかと思います。そういう戦いがあります。

もう一つは、山に木を植えて海が育つということを証明するという話しですが、昔の海の様子が分かれると大変良いけれど、全く分からないのです。仕方ないので、現在の海の様子を写真に取っておいて、100年後に、同じ場所で比べて見ていただきましょと、ビデオ撮影してあります。

<スライド42：V字の谷が折り重なる山々を背にした海（真瀬川を海から眺めた）の写真>

真瀬川ですが、V字の格好した山を流れています。遠景に見える、とんがった山が真瀬岳で、この麓からV字形をした谷間を流れて、写真手前に見られる住宅地に辿り着き、海に流入します。写真中央付近が真瀬川の河口にあたります。ところが、この河口から真瀬川の水がどのように海に広がっていくか分からない。

<スライド43：山から麓の平坦地を見下ろした(真瀬川河口付近の海の様子)写真>

上から見た図ですが、ここに真瀬川が流れています。こんなところに出て来るのです。真瀬川というのは、流域面積が八森町の約50パーセントを占めている川で、町に降った雨の半分はこのこんな狭いところに流れ込みます。川の水がどういう風に海に流れているのか分からない限り、山の森が良くなって、海がどのように変わるのか、さっぱり分かりません。

<スライド44：水の流れを表記した(真瀬川の水が海に流入する側を示した)地図> (方位が通常とはほぼ逆になっていますので、ご注意下さい。上が南です。)

これは実験した図面で、海が内陸の方に少しへこんだところがありますが、ここが真瀬川河口です。ブイを流しました。ブイを追跡し、船を出して何回か調査しました。一つの流れは、岸に沿うように流れて南下し、その更に南にある雄島のところから西、つまり沖合いに流れ、そこで真瀬川の水は大海に拡散している。もう一つは、河口から北寄りに流れ、いわゆる「海の二ツ森」のところで、渦をまいたり停滞したりしてウロウロしている流れがあるということが分かりました。中間には、沖合いから海の水が入って来ているということが分かったのです。

1と書いてあるところ、2と書いてあるところ、3、4と4カ所の水中の様子をビデオ撮影してあります。100年後に同じところを撮影して、比べて見てくださいということです。

<ビデオ1>

最初の、離れたこの島(雄島)のところですが、でも、海底に横たわる岩礁の末端部の岩肌には海藻が少ないですね。水も濁っていて、海藻が少ないと思いませんか。岩に海藻が付いていないです。綺麗なように見えますが濁っています。川から流れ込んでくる石が見えます。ふぐが泳いでいます。1と示された場所で、河口付近です。泥が沢山入り込んでいます。真瀬川というのは綺麗だから、泥があるとは思いませんでした。

<ビデオ2>

海の『二ツ森』のところですが、海藻がいくらか付いています。100年後は海藻がたくさん付いているだろう、ということですが、残念ながら僕は見られません。黒い物がポツンとありましたが、ウニです。海の二ツ森付近より少し南寄りになると沖合いから水が入ってくる『底瀬』という場所です。魚が随分いて、ウニなども、なんとなく生気が感じられます。でも、海底に横たわる岩礁の末端部の岩肌は海藻が少ないですね。

<ビデオ3>

真瀬川の河口から離れた場所では、海の水は澄んでいます。岩が白っぽくなっています。『磯焼け』という表現を使っている方もありますが、磯焼けの定義がまた、なかなか厄介で、ハッキリとはいえません。川の水が入ってないところというのは綺麗です。クラゲが来ています。100年後には、海藻がたくさん生えてる素晴らしい海になっていると夢見て、活動を開始していますが、皆さんもひとつ、お手伝いに来てくださると助かります。

<スライド45：水の流れを表記した地図>

八森町の真瀬川流域を撮影しておいたのです。

<スライド46：世界遺産白神山地憲章の文書>

私達は、『世界遺産白神山地憲章』というものを、青森県と秋田県共同で作成しました。私も委員の一人として激論を戦わせたのですが、委員の中に、服部英二さんという麗澤大学という大学の教授で、21年間パリのユネスコに勤務した方も参加しておられました。

日本での、世界遺産登録の申請が出てこなくて、やきもきしていたら、ようやく出てきて、申請書の中で白神山地のことが1番最初に書いてあったそうです。白神山地は、海から雲が出来て、山に雨を降らせて、雨が川となって、海に来て循環になっているということが最初に書いてあったそうです。

ユネスコでは、地球全体を循環という考えで見えていかなくては行けないと、全員一致で賛成、採択になったそうです。白神山地を一番最後に書いてあると、日本は何を考えているのかなと、首をかしげたのかも知れないですが、白神山地が1番最初に出ておったので非常に好感を持たれたそうです。

一番最後に一つ、どうしても皆様に紹介しておきたいことがあります。『白神山地は天然の博物館です。尊い遺産が伝えられたことに感謝し、ひとりひとりが』という文章があります。『尊い遺産が伝えられたことに感謝し』という文は、始めは『尊い遺産が残るように、頑張ってくださいました方々に感謝し』という文章でした。しかし、『人間ばかりではなくて、自然の営みも入る』というクレームがあり、太宰治の愛弟子だった大野さんという方が、非常に文章の立つ方ですが、『尊い遺産が伝えられたことに感謝し』という文章で表現されて、最終的に決まりました。

ここまでたどりついた陰にあった、沢山の方の努力に感謝する気持ちを我々は持たないといけないということでもあります。皆さんと今日、こうしてお目にかかれるのも八森町で、ブナが天然の資源だという考え方から出発して、いろいろな方の御世話になって今日ここにこうしてお目にかかっている訳です。

白神山地というのは、五つの使われ方をしてきたようです。一つは、縄文時代から続いてきてマタギの生活まで、自然と共に自然と融合した生活の場がありました。現代になりまして、森林資源、木材資源という視点で注目されて、木を切ってきたのです。鎌田さんや私達は、水資源ということに非常に注目して、森を守りましょうとしています。これからは微生物だろうと思われまます。僕も秋田県の実験研究所に行ってみました。まだまだ分からない微生物がたくさん保管されています。保管された微生物の中には、ガンを制御する微生物がいるかもしれないし、何が出てくるか分からないです。

宝の山です。次の世代は宝の山を有効に使うことを考えていかないと行けないだろう。最後は、この山を見て、みなさんが本当に良い顔をして帰られます。いわゆる人間の心を癒してくれる森ということです。これが五つの使い方ではないのかと思います。一つが終わって、次の一つというのではなくて、全部並行して行くものだと思いますが、白神山地というのは「宝の山です」とみなさんに紹介し、まとめとしたいと思います。

私達の活動は、現在に至るまで、アムウェイの環境基金を使わせていただきました。基金が無いと、まだまだ、夢のまた夢だったと思います。基金を使わせていただいたおかげで急に話しが進展してまいりました。この場を借りて、厚く御礼申し上げたいと思います。御清聴有り難う御座いました。

司会

工藤先生有り難う御座いました。時間がかかり延長してしまいましたが、先生にご質問、またご意見のある方、お一人か二人い

ただきたいと思います。手を挙げていただけますでしょうか。工藤先生ステージでお待ちください。

質問 1

どうも有り難う御座いました。世界遺産に指定されたことによって人が来る。それによって自然が破壊されるのと、逆にそれが守られということの微妙なバランスがあると思うのですが、実際には、村で、観光の人達に対して、どういう風にお金を落としてもらい、逆に村では観光で得た資金を活かそうという、ある程度ビジョンはあるのでしょうか。

工藤講師

良いビジョンはありません。話には出てくるのですが、実際にやるとなると大変に厄介なことがありますして、青森県側と秋田県側はかなり意見が違います。青森県側は『どんどん人を入れましょう』と、秋田県側は『入れないようにしよう』と。基本的な違いがあるので、一つの山をどうしていくか、なかなか統一見解が取れない状況です。八森町では、人を制限して、少しずつ入っていただきましょうというようなことを基本的な考えとしています。

司会

もう一方いらっしゃいましたか。手を挙げていただけますか。よろしいですか。先生少しお待ちください。植樹の話が出ておりましたが、10月の5日、6日に年1回恒例の植樹祭が白神であります。このツアーに、今日この会場の皆様、10名ご希望があれば、一般枠とは別に先生の方でお招きしたいと仰っておられます。ご興味のある方は、帰りに受付の方でお申し出いただくか、詳細の情報を入手ください。では、工藤先生どうも今日は有り難う御座いました。皆様もう一度拍手をお願い致します。（拍手）

次回のご案内をさせていただきます。最終会になります。今回はですね、元防衛庁長官、環境庁長官を歴任されました、愛知一夫先生をお招きして、地球環境問題についてお話をいただきます。また、恒例となりました最終回レクチャーの後の交流会ですが、講師の先生を囲んだ、皆様との交流の場を設けておりますので、次回も是非皆様ご出席いただきたいと思います。本日はどうも有り難う御座いました。お気を付けてお帰り下さい。（拍手）

資料 1

昨年10月に行われた悠久の森"白神"フェスティバルのふれあいコンサートで、第1回白神の詩コンテスト大賞作品『悠久の都 - My Home Town - 』が披露されました。

「悠久の都 - My Home Town - 」 作詞：森田文彦 作曲：松尾一彦

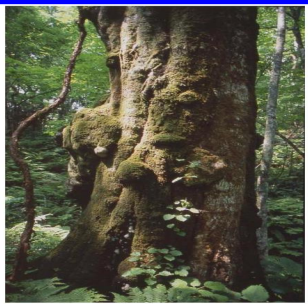
耳を 澄ませば 聴こえる 森の声 胸に 涙も そして風になる
こころ いつしか 癒され 生命の森よ 気高き山地よ
まよいながら 生きている 僕らを
流れる雲よ 静かね雨よ 遠く そっと 守って.....

人間は なくして はじめて 大切さ 思う 僕らも いつか星になる
何を その時 残そう 生命の森よ 気高き山地よ

それでも 愛を 信じて 生きたい
流れる雲よ 静かな雨よ 深く そっと 包んで.....

生命の森よ 気高き山地よ まよいながら 生きている 僕らを
流れる雲よ 静かな雨よ 遠く そっと 守って.....

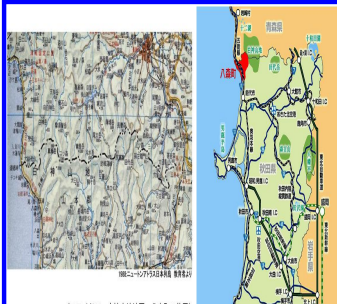
[*クリックすると、大きい画像を表示します。*](#)



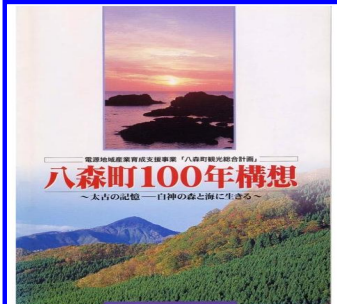
(スライド6：年代を感じさせる太い幹の写真)
カツラの木



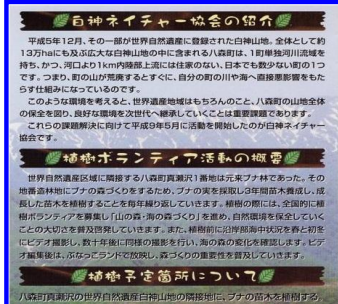
(スライド17：全体にとげのようなものを纏ったブナの葉の写真)



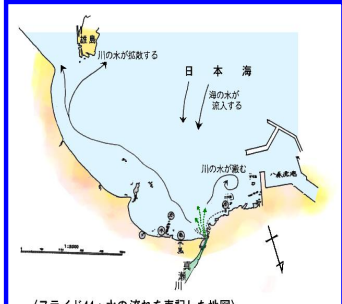
(スライド38：白神山地域、八森町の位置)



(スライド33：『八森町100年構想』表紙)



(スライド36：白神ネイチャー協会紹介の文)



(スライド44：水の流れを表記した地図)
(真瀬川の水が海に流入する側を示した)